慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	誰も答えを知らないから、研究では自分に向き合い、自分を見つけることができる：野崎貴裕専任講師に聞く
Sub Title	
Author	池田, 亜希子(Ikeda, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	
Jtitle	新版 窮理図解 No.28 (2018. 10) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	インタビュー
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000028-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

インタビュー　野崎貴裕専任講師に聞く

誰も答えを知らないから、研究では自分に向き合い、自分を見つけることができる

「『北風と太陽』だったら、私は学生に対して北風ですね」と話す野崎さん。研究を基本的に学生の自主性に任せるのは、研究を、これまで“本当にモノを考えること”が必要のなかった学生たちが、自分に向き合い、自分を見つける大事な経験の場だと考えているから。その考えの根底には、のびのびと育ててくれた両親と、個性を尊重する恩師から受け継いだ思いがある。

――やはり子供の頃からロボットが好きだったのでしょうか。

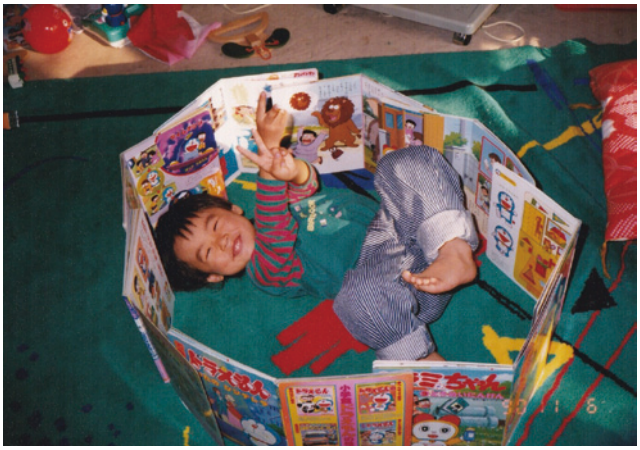
こういう研究をしているとよく聞かれますね。ロボットが好きだったとか、秋葉原に出かけていたといった答えを期待されているんだなと感じるのですが、そんなことは全くありませんでした。唯一、ドラえもんは好きで、絵本に囲まれて嬉しそうにしている写真が残っています（下の写真）。

とにかく、先生という存在が嫌いで、中学・高校の頃には学校をサボったりしていました。両親は放任主義だったので、特に咎められることもありませんでした。逆に、友達の影響で中学受験をしたいと話したら、「やめとけ」と言われてしまったほどです。

――自らの意思で浪人して慶應に進学したそうですが。

現役時代にも大学は受かったのですが、なんとなく受験したせいか「ちょっと待てよ」という気分になりました。「自分が何をやりたいか、これから何が必要か」をちゃんと考える必要があると思って、そのために一浪したのです。そのときロボットをやりたいんだと気づきました。ロボット開発に必要な制御工学が強い大学はどこか調べたら、慶應が日本では1位、世界でもトップ5位に入っていました。それで慶應を選びました。

しかし、いざ大学に入るとそんなことはすっかり忘れて、テニスサークルに入って学生生活を楽しみました。仲間たちと飲みましたし、2年生の時にサークルに入ってきた後輩と10年ほど付き合って、結婚しました。



――研究室への配属では、大西公平先生のところを志望されましたね。

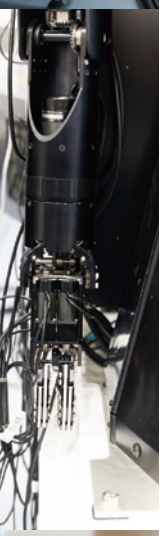
研究室配属を決める段になって、「そうだ、やりたいことがあったんだ」とロボットのことを思い出して、大西先生の研究室を志望しました。A4用紙1枚に志望動機などを書いて面接に臨んだのですが、それを見た大西先生から「お前、中野なのか。中野区立桃園第二小学校って知っているか？」と聞かれ、出身小学校が同じだと分かりました。それからは、母校の話ばかりしてしまいました。絶対に落ちたなと思いましたが、この思いに反して、採用していただきました。

実は、面接が終わって教室を出る時に大西先生から「お前、これ線を引いて書いたのか？」と聞かれました。私は、書類を綺麗に書くために、まずA4用紙に鉛筆で線を引いてから文字を書いて、その後に線を消していました。面接では研究には全く触れなくても、書類にはちゃんと目を通して、そこから私のやる気を感じ取っていただいたのだと気づき、感激しました。

――どのような研究室だったのでしょうか。

『北風と太陽』の北風のような先生でした。それは、面倒見のいい先生がいるのに対して、大西先生は放任だったということです。“学生の個性を尊重する”という考えから、そうしていたようです。ただ、たくさんいい言葉を掛けていただきました。「目の前に種が植わっているとしよう。芽が出た時、どうしたら育つと思うか」と問われたことがありました。「大きくしようと芽を無理に引っ張ってしまえば、芽は抜けて死んでしまう。芽を育てるには日光を当て、十分な水と肥料を与えること。真に成長を願うなら、教員ができる最大のことは環境を整えてあげることだ」とおっしゃっていました。

“青春の悩み”について話されたこともありました。「今お前は、誰が好きだとか、成績が落ちるとか悩んでいるかもしれないけれど、他人から見たらどうでもいいことだ。こういうのを“青春の悩み”という。本当の悩みとは人のために悩むことだ」とおっしゃるのです。「ただ、本当の悩みの時に頑張れるのは“青春の悩み”で悩みぬいた人だけだから、今、大いに悩みなさい」といっていただきました。この言葉で、その後、何回も悩みを乗り越えられました。



――野崎さんはどのようなタイプの教員でしょうか。

大西先生が格好よかったから、私も基本的には放任主義です。ただ、中には面倒を見てあげたほうが伸びる学生もいるので、学生に合わせるように心がけています。

最近の学生に対しては、あまり自分で物事を考えてきていないな、と思います。高校までの試験や入試では覚えた答えを書けばいいわけですから、仕方がないのですが、相変わらず周りの大人の価値観で生きているのです。研究は、それを崩すひとつの方法です。研究という答えのない新しいことに向き合ううちに、学生たちは自分に向き合って、自分を見つけていく。成長していくのが本当にすごいなと思います。

――横浜国立大学のポストに就いたり、ベンチャー企業を立ち上げたりいろいろ経験されていますね。

パワーエレクトロニクスを学びたくて、横浜国立大学に1年間、ポストを得ました。この時も、大西先生の以前からの教えである「未来は3秒で変わる。チャンスは絶対に逃してはいけない」という言葉が背中を押してくれました。慶應に戻ってきてからは、学生の指導はもちろん、研究成果の実用化や企業との製品開発などで日々忙しくしています。特に、論文を書くことが第一の“大学の研究”と、利益を出さなくてはならない“企業の開発”の間には大きな溝があって、それを埋める大変さを日々実感しています。ただ、論文を書いて成果を出しながら、世の中に意味のあるものを出していくのは、生半可なことではありません。どちらも手を抜かないために、パワフルでなくてはと常々思っています。

――野崎さんにとって慶應とはどのような場所でしょうか？

一般入試を受けて入ってきた学生のほかに、附属の高校から進学してきた内部生がいたり、海外からの帰国学生がいたりと、学力も個性もバリエーション豊かな大学だと思います。学生たちを見ていると、隣に英語が得意な友達がいたら、自分も英語をやらなくてはと思ったり、おしゃれな学生を見て自分も服装に気を使ったり。お互いに刺激し合いながら成長していると感じます。

今年の2月に、男の子が生まれました。慶應義塾の“義”に私の“裕”で、義裕と名付けました。どれだけ慶應が好きなのかと思われるかもしれませんが、先生を嫌っていた私が、ここで博士号を取り、とうとう予想もしていなかった教員にまでなったのですから、慶應は人生を変えてくれた大切な場所だと思っています。学生よりも早く帰りたくはありませんが、時々子供をお風呂に入れるために早く帰ることはあります。とても可愛いです。初めてプレゼントしたぬいぐるみは、もちろん「ドラえもん」です。でも、私が歩んだ道を進んで欲しいと思っているわけではありません。

◎ちょっと一言◎

学生さんから：

- 面接で「覚悟はある？」と聞かれ、先生について行きたいと思って「頑張ります」と答えました。ロボットに興味があるのですが、これから発展する分野だと思っています（学部4年生）。
- 好きなことをやらせてもらっているので、満足しています。研究の姿勢には厳しいですが、背中を後ろから押してくださる人です。先生がいないなと思ったら、アメリカにいたりします（修士1年生）。
- ロボット技術を広めるために怖いくらい熱心です。ここでは、研究すべき誰もやっていないテーマを自分で探さなくてはいけません。「そのテーマは研究じゃない」と言われたことがあります。不安もありましたが、研究というプロセスをすべて自分でやったことが、大きな自信になりました（修士2年生）。

（取材・構成　池田亜希子）

さらに詳しい内容は
https://www.st.keio.ac.jp/education/kyurizukai/

慶應義塾は、私が研究を続け、大学教員になると決意した場所。学生にも人生の目的を見つけてほしい。

野崎 貴裕

Takahiro Nozaki

慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科専任講師。博士（工学）。専門は電気電子工学、制御工学、ロボット工学。2014年に慶應義塾大学大学院理工学研究科総合デザイン工学専攻後期博士課程を修了後、横浜国立大学大学院工学研究院の研究教員を経て、2015年より慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科助教（有期）、2018年より現職。